

琉球大学学術リポジトリ

学生のコメントから『魅力的な授業』とは何かを考えてみる

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 加藤, 潤三, Kato, Junzo メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41347

学生のコメントから『魅力的な授業』とは何かを考えてみる

「人間関係論」担当 加藤潤三（法文学部）

このたびは、プロフェッサー・オブ・ザ・イヤーの栄誉を賜り、誠にありがとうございます。まずは大学関係各位、授業評価をしてくれた学生諸君に感謝申し上げます。

さて、このような賞をいただくと、「賞をもらえるぐらいなのだから、さぞかし良い授業をやっているのだろう」と思われるかもしれないが、それに対しては少々困惑してしまう。私はFDの専門家でもないし、教員としてのキャリアもまだまだ浅い。そんな私が、「こういう授業が望ましい」や「こうすれば授業評価を高くすることができる」などと言うのは、考えただけで赤面ものである。なので御礼だけ述べて、…としたいのだが「きっとそれだけだとダメなんだろうな」と小心者のもう一人の自分が言うので、どのような授業に対して学生は高く評価するのかについて学生の視点から、具体的には学生が授業評価で書いてくれた自由記述やテスト時に書いてもらった授業の感想をもとに考えてみたい。なおこの話を進めるにあたって「自分の授業＝授業評価の高い授業」という厚顔無恥な前提を置かなければならないが、その点をご容赦願いたい。

まず学生のコメントで多く見られたのが、「聞いていて楽しかった」や「内容が面白く、興味が持てた」などである。つまり学生は、『知的好奇心』を高めてくれる授業を良く評価するようである。では、学生がどのような点に知的好奇心を感じているのかについて詳細に見ていくと、「今社会で起こっている出来事の背景がわかった」や「実際に役立ちそうです」、「将来的に活かしていきたいです」など、社会や自己の分析に役立つ実践的な授業に知的好奇心が揺さぶられるようである。青年期にある学生はアイデンティティの確立という重要な発達課題を抱えている。その彼・彼女らにとって、社会を客観的かつ公正に捉え、社会における自己存在のあり方や位置付けを認識できるようになることは極めて重要なことであり、その一助となる授業に学生は魅かれるのではないだろうか。

また学生の中には、「人間の心にある理論を知れてよかった」や「科学的な考え方を知れて面白かった」など、科学的な知や学問的探究に興味を持つ学生も少なくない。研究機関・高等教育機関である大学として、学問の何たるかや科学的思考の重要性を伝えることは、学生の知的好奇心を駆り立てるだけでなく、学生の自律的で自発的な研究意欲に火をつけるかもしれない。つまり授業という場が、次の新しい科学・学問を生み出す土壌になりえるのである。知を継承し、連鎖させていくためにも、授業担当者はできるだけ良い土壌（授業）を提供することが重要であろう。

次に、知的好奇心に関わるコメントと同等に多かったのが、「わかりやすかった」や「頭に入りやすかった」など『理解のしやすさ』である。特に学生は、単に文字だけでなく、例えばスライドデザイン、写真やアートなどのイメージ、動画などの視覚的な情報に対してセンシティブであり、適度に用いればスムーズに情報伝達できるだけでなく、集中力の持続にも効果的である。また、声の聞き取りやすさやイントネーション、ジェスチャーについても学生はよく見て（聴いて）おり、コメントもかなり多い（これは出身なのでどうしようもないが、私の場合、どうも関西弁

が面白いようである)。授業はコミュニケーション場面である。それも1対多の少し特殊なコミュニケーション場面である。自分の伝えたいことや知っておいてほしいことを多くの学生に聴かせるためには、コミュニケーション上の演出(言語・非言語ともに)も必要ではないだろうか。またコミュニケーション全般がそうであるように、授業でも一方的ではなく、双方向的であることが望ましい。唯一私が工夫していると主張できることがあるとすれば、必ず最初の授業で、受講生に授業に対してリアクションをとるように求めることである。リアクションの仕方は質問でもいいし、表情でもよい(「面白ければ面白いという顔、わからなければわからないという顔をしてほしい」と伝えている)。リアクションに関するラポールがとれると、学生のリアクションはどんどん変化する。最初の頃は学生の表情も弱く、読み取りにかなり気を配る必要があるが、しばらくすると気持ち良いぐらい「わからない顔」や「面白い顔」が出てくる。こうなると話す側もどんどん話したくなるし、それに応じて学生のリアクションも大きくなり、そうなるとさらに話しやすく…というポジティブな関係が成立するようになる。ただし、そもそも学生がリアクションしてくれるかどうかは、教員によるお願いの如何ではなく、授業全体の雰囲気によるものである。授業の中でどれだけアイスブレイクできるかが本質的な問題であり、それがうまくいった時にリアクションが返ってくるのである。つまり、リアクションは雰囲気作り・アイスブレイクがうまくいった証左であり、授業を自己点検する上で有益なバロメーターとして活用するようにしている。

また学生の理解しやすさを促進させる上で、体験型授業も効果的である。私の場合、コミュニケーショントレーニングや心理テストを入れているが、このような体験型授業を導入することで、座学だけでは得られない経験的な知識を学生に提供できるとともに、授業に演習的な要素が取り込み、学生の授業参加を促すことができる。またこのような体験型学習は、学生に理論と現実の対応や自己理解を深めさせるなど、先述の知的好奇心の向上にも有益であり、この面からも効果的であると考えられる。

以上をまとめると、私個人として授業を行う際、以下のようなモデルを念頭に置いている。

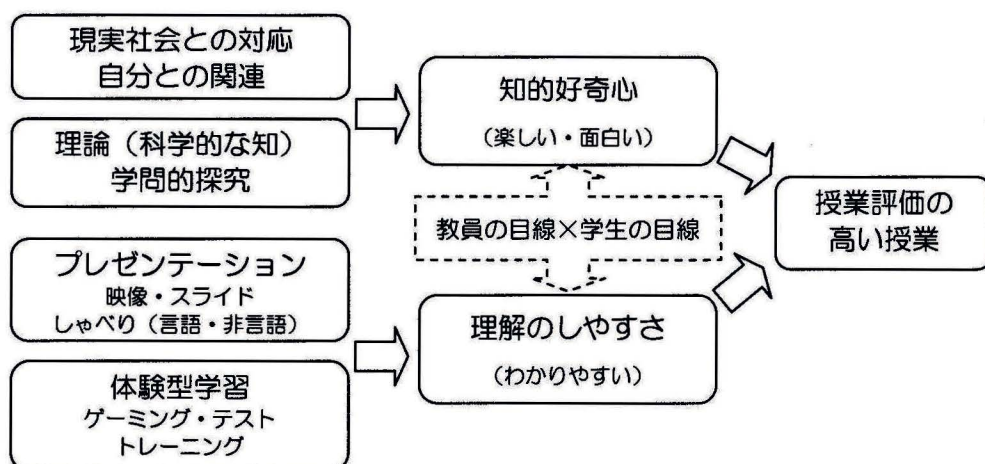


図. 私なりの授業評価のモデル図

なお、私がここまで述べてきたことは何ら斬新でもなく、特に際立って優れたことを言っているわけでもない。教員であれば誰もが普通に思っていることである。「ごく普通のことを普通にやる」、よく使われるフレーズであるが、やはりこのことが重要な気がする。

最後に、私が授業を行う際に特に心がけていることを書いて終わりにしたい。それは、「自分が学生だったら、どんな授業だったら聞きたいか」である。授業で教員が伝えたいことと学生が聞きたいことがマッチングしていれば、授業はスムーズにはかどる。しかし私自身が学生だった時を振り返ると、そうでない授業も少なからずあり、やはりその授業は退屈だった。現在、当時とは逆に教員として授業を行う立場になったが、できるだけ学生に聞きたいと思ってもらえる授業を行いたい。このように「マッチング」を強調しすぎると、学生に合わせた迎合的な授業をやっているように見えるかもしれないが、私自身、迎合的な授業を展開しているつもりはないし、そのようなやり方を推奨するつもりは毛頭ない。授業自体のレベルを下げる必要もないし、何より学生がそれを望んではいない。私が重要だと思っているのは、教員の立場からだけでなく、学生の視点にも立って授業を再構築しなおすこと、日々の授業の中では学生の反応にセンシティブであり、臨機応変に対応することである。

以上、私が授業を行う時に考えていることをとりとめなく書きましたが、色々ご意見やご批判があると思います。私としても良い機会ですので、ぜひご意見・ご批判賜れば幸いです。